



2018. 6. 10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

4/7 開催 地球の木講座

今知っておきたい カンボジアの話

米倉さんが見るカンボジアの社会課題

カンボジア王国は熱帯モンスーン気候に属し乾季(11月~5月)と雨季があります。体感気温は「常に30度ぐらい」と米倉さん。筆者がシェムリアップで“るしな”(地球の木が支援していたチャイルドケアセンター)を訪問したのは10年位前になります。どこまでも続く平らな大地、そしてキラキラしたトンレサップ湖を船で渡ったのですが、暑くて躍動的な国という印象でした。

米倉さんは、2008年までJVCのカンボジア代表をされていて、現在は有機農業を普及する現地NGO・CEDAC(カンボジア農村開発研修センター)のプログラム「農家の生計改善と乳幼児の栄養改善」に関わっています。カンボジアの子どもの健康はASEAN諸国の中で最悪で、カンボジアの5歳未満児の死亡率は2016年1,000人中31人(UNICEF発表)で今後ますます悪くなる予想があります。なぜでしょうか?それは、政治と経済に大きく影響されているようです。1991年にパリ和平協定が結ばれ、20年以上悪政を続けたクメール・ルージュのポル・ポトは政権を追われました。しかし、社会主義から資本主義への移行がスムーズにいかず、さまざまな社会問題を解決できずに市民は苦しい状況に追いやられています。

一帯一路を掲げる中国の為の中国による支援という名の投資で、急速に発展する経済。そしてそれに翻弄される小国カンボジア。人口1,500万人(2008年調べ)のうち労働者は国内が100万人、海外へは150万人が出稼ぎに出ています。国内労働力が足りないため、出産して間もない若い女性も自宅から1時間近くかけて工場に働きに出たり、海外に出稼ぎに出ます。乳幼児の面倒は祖母や残った家族が見ることになります。

CONTENTS

■ 地球の木講座「今知っておきたいカンボジアの話」	1~2
■ ネパールスタディツアーレポート2018	3~5
■ 支援地から ラオス	6
■ SDGs「それって地球の木がずっと言ってきたこと!」	6
■ 気仙沼だより その21	7
■ 地球の木と私	7
■ 活動日誌	7
■ 「ちょっとり体験!ラオスの村の暮らし」	8
■ インフォメーション	8
■ 編集後記	8

地球の木は設立当初からさまざまなプロジェクト支援でカンボジアに関わってきました。現在は、カンボジアの女性が作ったクラフトの販売や、レイプ・DV被害女性のシェルター支援をしています。カンボジア社会はめまぐるしく変化しています。そこで地球の木では、「今知っておかなければ」と、カンボジアで長く活動をされ現在、昭和女子大学国際学部で教鞭をとられている米倉雪子さんにお話をいただきました。
(副理事長 廣瀬 康代)



毎月子どもの栄養によいおやつを勧めています

また、都市と農村部の生活条件の格差も広がっています。農村においては都市に比べ飲料水の質が悪く、母親が働きに出ているために離乳食の与え方など食を取り巻く環境が大きく変わっています。地場野菜より輸入される野菜のほうが安価であったり(市場で売られている野菜の8割がベトナムや中国からの輸入)、伝統的なおやつよりスナック菓子や砂糖たっぷりの飲料水が手に入りやすい価格です。いろいろな支援による健康管理のグッズも部屋の段ボールの中に忘れられていたり、有機農業による家庭菜園の研修などを受けても実践していない家庭のほうが多いったり、問題はたくさんあります。家計簿トレーニングを受けても、計算が苦手なので結果をださないで途中でやめてしまったり、支出のほうが大きく嫌になってしま

うなど、生計記録をつける意義が伝わらないこともあるそうです。

教育は成人識字率がラオスに次いで74%とカンボジアは低く、義務教育は9年で、多くの場合、午前か午後かの2部制です。また都市部と農村の格差は大きく、都市部のお金のある家庭は私立に通わせたり、特別に教育を受けさせています。

近頃は現金収入があるので、金貸し業が盛んで、お金を借りる人が増えているようです。お金を借りて家を新築する人、伝統的に冠婚葬祭を立派にする人など私たちと同じだとお話を聞きながら感じました。

お金の使い方は、どこでも頭の痛い問題です。しかし、村長さんが村民に6年間家計簿をつけることを奨励し、乳幼児の体



重測定をしている村は順調に子どもたちが成長しているそうです。

カンボジアで今何が起こっているのか

このところ、何度もカンボジアで起こっていることの内情を訴えにカンボジアの人が来日していることをどれくらいの方がご存知でしょうか？耳にしないという方が多いと思います。それは日本のテレビや新聞ではほとんど報道がないからです。

昨年の経済成長率が6.9%となり表面的には順調に発展しているように見えますが、民主主義を掲げている人民党率いるフン・セン首相は33年間にわたって政治の実権を握っています。権力と資産の集中が政治の汚職腐敗を生み続け、国民の不満を増大させています。フン・セン首相は、最大野党救国党の2013年の総選挙と地方評議会議員選挙での躍進に不安を感じ、野党党首に逮捕状を出しました。昨年11月には最高裁が救国党に解党命令を出して、党幹部118人の政治活動を禁止しました。また、メディアへの弾圧も強まっていて、24年間発行されていた日刊英字新聞「カンボジア・デイリー」紙が約7億円弱の税金の未払いを課せられ廃刊に追いやられる状態になっています。このようにフン・セン首相が野党やメディアへの弾圧を強めていることが、カンボジアの民主化のためのプロセスを後退させているとのことです。また、フン・セン首相が強権的になったのは中国という大国の援助、投資が急増し自信をつけたからだそうです。

これを見て、欧米政府の多くは7月に行われる総選挙がこ

のままでは公正に行われないということでの選挙の不支持を表明していますが、日本政府は、河野外相がカンボジアを訪問して選挙の支援を約束してきました。支援には私たちの税金が使われています。

今年、日本とカンボジアは1953年の外交関係樹立から65年を迎えました。民主化へのプロセスを支援するために、カンボジアの平和達成に大きく尽力し、初のPKOの自衛隊派遣や選挙監視団の文民警察官の派遣や、ODAやNGOが生活基盤の復興のために貢献してきました。これからもカンボジアの人々が平和に暮らせるように、今までの努力が無駄にならないようにするには、できることは何でしょうか。



昭和女子大学国際学部
国際学科准教授・米倉雪子さん

「子どもたちが取り残されないための調査や活動をしながら、カンボジアの人たちのために何ができるかをこれからも考えていくたい」という米倉さんの締めくくりの言葉を胸が熱くなる思いで聞きました。私たちも何ができるのか一緒に考えていませんか！

講座参加者の感想

- ◆ 学校で習わないが、カンボジアのことを聞いて勉強になった。(10代)
- ◆ カンボジアについて少し視点の違う方向で聞いて良かった。
- ◆ 政治的な話は苦手だが、開発の在り方を考えるうえで避けて通れない。
- ◆ 大学で発展途上国について話を聞き興味を持って参加した。カンボジアに焦点を当てて詳しく聞けた。
大学でも発展途上国について学びたいと改めて思った。またボランティアにも参加したいと思った。高校生がいなかつことに衝撃を受けたが、自分に今できることは同世代の友だちにも知ってもらうことだと思うので、自ら行動したい。(10代)

カンボジアチームメンバーを
募集中

カンボジアのプログラムで地球の木は現在CWCC(カンボジア女性緊急救済センター)を支援しています。この活動を中心にカンボジアで何ができるかを考えていきます。興味のある方は事務局までお問い合わせください。

支援地ネパールを訪ねる、ふれあいの旅

今年度のスタディツアには個性も経験も豊かな5人が参加しました。教職経験者、電気技師、子育て支援スタッフ、元栄養士、参加型開発を学ぶ大学生。ダンス好きでコミュニケーションの取り方上手な皆さんのおかげで村を多面的に見ることができました。

ツアーの目的、その1「少数民族の村の暮らしや生きる知恵に学ぶ」。参加者たちは自給自足に近いシンプルな村の暮らしと新鮮な食べ物を経験し、自らの生活をふりかえる機

会となりました。

その2「幸せ分かち合いムーブメント」について学ぶ。どこへ行っても歓迎され、10年続けてきた村人との密接な関わりを感じることができました。また、物質的な支援だけでなく、精神的な支援もあることを知ることができました。

その3「ネパールの文化について学ぶ」。ホーリーの祭りや家庭訪問を通じて、人々の結びつきの深さについて学ぶことができました。
(ツアーリーダー 丸谷 士都子)

ネパールスタディツアーデイ程

月日	訪問地	プログラム
2/23(金)		羽田空港集合 〈機中泊〉
24(土)		カトマンズ着、ドゥリケルにてオリエンテーション 〈ホテル泊〉
25(日)	マンガルタール村 ラジャバス	ラジャバス到着 村のお祝いに参加 〈ホームステイ〉
26(月)	マンガルタール村 ラジャバス	村の最高地点ブミチユリ (標高2,500m)へ サレニの小学校訪問 山羊の飼育グループと懇談 小学校の先生宅であやとり大会 〈ホームステイ〉
27(火)	マンガルタール村 ピンタリ	チャトレビパル小学校訪問 小水力発電・水路見学 かごづくり 〈ホームステイ〉
28(水)	カトマンズ	買物、世界遺産の古都を見学 〈ホテル泊〉
3/1(木)	カトマンズ	SAGUNマハンタさん宅訪問 ヒンドゥー教の祭りホーリーを体験 カマルさん宅でツアーのふりかえり と夕食 〈ホテル泊〉
2(金)	チャンドラギリの丘	チャンドラギリの丘(標高2,540m) 寺院見学 イマドールにてパーティー 〈リソースセンター泊〉
3(土)		バンコクへ 〈機中泊〉
4(日)		朝、成田空港にて解散



スタディツアの醍醐味はホームステイ

「ナマステ」ふれあいの旅

佐原 文子

「ナマステ」何度この言葉を今回の旅で言い、そして聞いたことだろう。たった一言の挨拶の言葉「ナマステ」。その言葉に返ってくる人々の笑顔と言葉の優しさに毎回ほんわかとした心の安らぎを覚えることができたのは何故だろう。本当にこんな思いは久しぶりだった。

いつもの旅と違って新しい経験をすることがとても多かった。その一つは村でのホームステイ。車1台がやっと通れる山道を延々と登ったところに村があり、点在する家と耕された畑とヤギや二フトリの家畜がいる景色は絵葉書で見たネパールの少数民族の村そのものだった。昔からの変わらない部分と変わっていく部分が混在していて、子どもの頃に感じていたような懐かしい不思議な気持ちになった。

小学校を訪問し、子どもたちの学ぶ様子を実際に見ることができた。お世辞にも立派とは言えない校舎。教材も教科書も学用品も多分かなり不足している環境なのに、子どもたちはそれを感じさせず楽しそうに学習していた。学校というと先生が教えるところというイメージが強いが、訪れた学校では間違いなく子どもたちが学んでいた。学ぶことでもっと知りたい、もっと考えたいと思う子はやがて自ら進んで上の学校に進学していくことだろう。先生方も表情が優しくて、気負うことなく子どもたちに接している印象を受けた。もう少しだけ本や学用品が揃っていれば良いのに、と思うのは、失礼なの

どうか。ネパールの就学率は年々向上していると聞いたが、今以上に全ての子どもたちが学べる環境が整えられていくことを願う。



住宅再建が進むピンタリ

「たった1枚のチラシ」とネパール

上原 嘉宏

どんなに札束を重ねても、決して買う事の出来ない貴重な素晴らしい体験をさせてもらいました。

ある日、ラジオ体操後に体操仲間より「1枚のチラシ」をいただきました。ハズミというものは怖いものです。「さざ波ひとつたぬ沼にも、小石ひとつから思わぬ波紋がひろがる」というたとえがあります様に、「たった1枚のチラシ」がきっかけで、ネパールの村にホームステイ体験の機会を与えてもらいました。

早起きの私は、宿泊先々で、山々の間からまだ朝日が覗かぬ朝ぼらけに村や下町を散策致しました。なんと、まだ薄暗いのに、村の老人、若い女性など、皆が助け合って、地震で崩れた家々の横に、新しい家を建てる為の材料などを運んでおりました。

「ナマステ」、「ラッソ（タマン族の挨拶）」と声をかけると、見ず知らずの私でも皆さん明るく挨拶を交わして下さり、各家々の軒先で朝日を浴びながら地酒の口クシやお茶を当たり前のように振る舞って下さり、言葉は通じないが、芯からの温もりを身に染みて感じました。中でも若い女の子が、重いレンガ、ブロックなどを全く嫌がることなく、ニコニコとドッコの籠に入れ、ナムロという紐を頭に掛け恥ずかしがりながら運んでいる清々しい姿が、今でもとても脳裏に残っています。

支援の多くは、与える側も求める側も互いにより早く喜ぶ姿の結果ばかりを求め過ぎて、目に見えるものばかりを与えているのではないか？「1年先を思うは花を育て、十年先を思うは木を育て、百年先を思うは人を育てる」といわれる様、百年先をみて支援する義務が我々にあるのでは、と思いました。

地球の木のツアーリーダーが、「先生が学校を作るのです。決して建物が学校作るのではありません」と教師たちに語っていたのを聞いて、地球の木の方向性に安堵致しました。

村の暮らし

川端 和子

あちらこちらの尾根の上までも多くの家と人々の暮らしがあふれています。各々の家の軒下にはたくさんのトウモロコシがぶらさげられていきました。台所は土間です。カマドがあり、ここで食事の準備がされるようです。なかにはガス台（水牛の糞を使ったバイオガス）のある家もありました。しかし、土間に座ったり、かがんだりの食事作りは、なかなか大変なことです。これからどの様に身体にやさしい作業になっていくのか改善が楽しみです。

水は山から引かれています。給水場から家の外にホースで引かれている家もありましたが、重い水いで坂道を運ぶ姿も多くみられ、まだまだ重労働であることでしょう。

現地の村や現地スタッフの人たちから、これまでの活動や支援の事をたくさんおしゃてもらいました。事前学習でいただいた資料ではよく理解出来ていなかった事が、それぞれの村や街に直接ふれる事によって、自分のものとして考えられる様になったと思います。これから活動が楽しみになります。

ネパールの“山”、白い雪をいっぱいかぶり、雲の上にうかぶ姿を、行きも帰りも見ることができ、とてもラッキーでした。



色の祭りホーリーを楽しむ市民

ネパールの女性たちと私

野本 遥香

私はこの9月からは開発学の修士課程で本格的に国際開発について勉強・研究する予定です。今回は、その前にネパールの開発における現場を見たくて参加しました。ネパールは初めてで驚くことが多かったです。

注目したのは女の子たちの地位です。ネパールの女の子たちの地位は依然として低く、女の子は学校に行かなくて良いという考え方や児童結婚がまだ存在します。女性は一日中働きますが、男性は道端でぶらぶらしている人をよく見かけました。女子差別は根強く、時に女性自身も加わっているような状況です。しかし、私はこのスタディツアードでこの問題に立ち向かう人たちを見ました。ツアード同行していたニルマラさんは女性支援のための活動をしたりして力強く女性たちの背中を押し、参加している学生は女性の地位向上に意欲的でした。また国レベルでも、現在国会は議員の30%を女性にすることが決められています。

今回はネパールの女の子を囲む事情について、その現場を垣間見ることができました。現状での彼女らの地位はあまりよくありませんが、しかし未来への希望

は確かにあります。日本もこれを対岸の火事として見てはいられません。世界経済フォーラムが昨年発表した男女格差指数に基づいたランキングではネパールが111位に対して日本が114位です。女性の地位向上について、お互い意見交換しつつ支え合えるような仲になればいいな、と思います。

私もネパールの頑張る女の子たちに負けてはいけません。しっかりと勉強して、開発、そして女性の地位改善に貢献できるようになりたいです。



手食体験

支援の実相と村人との交流

岡田 栄子

いつ会員になったのかも忘れていたが、ネパールで1人で住民主体の支援活動をしている日本人男性「OK/バジ」との交流をきっかけに、地球の木の活動に関心をもつ。支援した学校を目の前にすれば、物的支援の象徴と映る。それはそれとして…質的、精神的な支援とプロセスは？とアンテナを張って注視した。

行く先々での熱い歓迎と歓待振りに、現地の思いが伝わってくると実感。地球の木メンバーに対する羨ましいほどの親密感は長年に渡って培われてきた証拠だ。特にホームステイ先のお母さんとのシーンに感涙した。チャメリさんは、丁度ご主人を亡くした後に地球の木が訪れ、励ましてくれたことを忘れない涙を流した。層の厚い現地スタッフとの連携も、信頼と相互理解で成り立っている。

身一つで飛びこんだ村の祝宴。正にこのツアードの交流は踊りで始まり踊りで終わった。形式や格式にとらわれることな



ホストファミリーと打ち解けて家族のよう

く、誰でも自由に踊れる文化に拍手。知らない外国人が来て、親しげな笑顔で何やら見たこともない遊びや歌を披露する。無邪気な子どもたちはとびついですぐ仲良くなれる。これが楽しくて幸せだといつも私たちは言う。このパターンが私たちの云う交流なのか？でも、あの踊りは村人に笑ってもらって良かった。笑いの意味が何であれ…。

私は山羊を飼っているのですが、「メロ ガルマ テインオタバカラ チヤン（私の家には3匹の山羊がいます）」とネパール語で話すと、どっと笑いがはじけ、あちこちで受けた。

帰国してから、山羊への眼差しが優しくなった。人間、どこだって生きていけると再確認。子育てに迷うママたちに更に寄り添う。地球の木のイベントに参加したい。



園児と遊ぶ

希望が見えるネパール

丸谷 土都子

マンガルタール村に向かう道沿いにレンガ工場の煙突が目立つ。カトマンズ市内は住宅を建てるため、レンガ工場はなくなっているが、郊外にどんどんできているそうだ。川沿いには砂利や砂の山。地震の復興による建築ラッシュだ。

そんなネパールだが、新しい憲法の下、新しい動きがある。昨年地方選挙が実施され、女性が大躍進を遂げた。国会議員を選ぶ総選挙も終了した。これまで郡レベルで予算が決められていたのに対し、区（これまでの村）レベルに予算が下りることになる。使い方を決めるのは村の人たち。みんなの合意の下で決めていくには、参加型の取り組みが非常に重要になる。ネパール参加型開発の第一人者であるSAGUNのカマルさんは大忙しだ。地球の木とSAGUNが進めてきた参加型の事例がそれに貢献しているとしたらこれほど嬉しいことはない。

医療制度にも改革が進む。各区にヘルスポートを設置し、38種類の薬が無料で提供される。市や町の単位にはそれぞれ15床ある病院が義務づけられる。健康保険制度が導入された。1世帯2,400ルピー支払えば家族5人までが5万ルピー分まで医療が受けられるという。改革のほんの一部だが、大地震後の混沌のなか、希望の光が射しているのが見えた。

ラオス農村部の学校事情

from Laos

ラオスの義務教育

今回はラオス農村部の教育の現状についてお伝えさせていただきます。2015年改正教育法によると、ラオスの義務教育は現在、通常6歳で入学する初等教育5年、前期中等教育4年、後期中等教育3年が9年制で、無料で受けられます。その後、後期中等教育3年が続きます。日本で言えばそれぞれ、小学校、中学校、高校にあたるかと思います。

2005年と2015年に調査した人口統計によると、ラオスの人口のうち一度も通学したことがない人の割合は、2005年の23%から減ってはいるものの、いまだ13%の人が通学したことがあります。男女間の差は10年間で14ポイントから8ポイントに減ってはいるものの、依然として存在しています。また、都市部と農村部の差も顕著です。

スタッフのソムソンの場合



1987年生まれの31歳で、サワンナケート県の農村出身であるスタッフのソムソン(写真)の例を聞いたところ、統計データだけではわからない状況が分かりました。

彼が小学生だったころ、郡の中心地からおよそ4km離れた自分の村にあった学校は、小学2年まででしたが、現在は全学年に対して授業が行われ、さらに幼稚園ができたそうです。中学3年からは県庁所在地サワンナケートにある大学内の、ベトナムによる支援でできた少数民族向けの中学校に入りました。貧しい家庭出身ながら能力のある子どもとして、郡行政から選抜されてこの学校に入ったそうです。その後サワンナケートの高校、大学を卒業しています。

小学校と一緒に入学したのは25人で、20年以上前の当時は



農村の学校で遊ぶ子どもたち

ほとんど男子だけでした。5人の兄弟姉妹の末っ子で、1人の兄は中学校に行かず、2人の姉は小学校を途中で辞めて働いてくれたため、自分は進学できたようです。小学校を出る前に結婚する同級生もいたそうで、結局小学校を卒業したのは彼1人だけでした。今は「自分の村では子どもの8割くらいは小学校を卒業するのでは」とのことでのことで、ラオス農村部にも教育が行き届つつあるようです。

村の暮らしと子どもの教育

村の暮らしのうち、JVCのプロジェクトと直接関係があるのは農業生産や森、川などの保全だけと勘違いしてしまいそうになりますが、実際は教育とも関わっています。世帯のうち多くの子どもが学校に通えば農作業の人手が足りなくなります。一方で森や川が保全され、普段からキノコやタケノコ、魚などの食料を採取でき、農業生産が安定すればより多くの子どもが学校に通うことができます。これに限らず、村のひとつの側面の変化は他の側面に影響を与えます。このように村の暮らしはあらゆる側面が折り重なって成り立っています。

村人たちのかけがえのない生活を調査などで少しづつでも理解しながら、村人たちに役に立つ活動を行うよう努めていきたいと思います。

(JVCラオス事務所 山室 良平)

「それって地球の木がずっと言ってきたこと！」

SDGs(Sustainable Development Goals)とは、「持続可能な開発目標」。正式名称は「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」です。2015年に終了したMDGs(ミレニアム開発目標)の後継として、同年9月に国連加盟国全会一致で採択された、2030年までの地球規模の課題解決を目指す17の大きな目標のことです。

その前文には、「このアジェンダは、人間、地球、および繁栄の行動計画」であり、又「誰一人取り残さないことを誓う」との決意表明が示されています。

MDGsが途上国の貧困・教育・健康・環境問題などを解決する目標であったことに対して、SDGsは、そういう問題を今や途上国に限定されない世界共通課題として地球全体の未来のため、すべての国の努力目標と位置づけています。途上国を支援するだけでなく、先進国の人たちも自らの暮らしを足元から見直し、課題に取り組もうというのがこのSDGsの

理念です。(それって地球の木が設立以来ずっと言ってきたことじゃない! そうなんです。国連のお墨付きをもらったみたいなんです)

しかしそれはまた、今まで他人ごとのようだった貧困や格差、異常気象などが、近年は日本国内の「自分ごと」の切実な問題となってきたことを意味しています。

SDGsの17の目標のうちの1つ「つくる責任 使う責任」という項目は、「持続可能な生産と消費」を私たちが生活者として実行すること。皆さんも、まずは日々の生活で、「これはSDGs的にどうなのかな」と自らに問い合わせながらこの地球規模のチャレンジに参加してみませんか？

(ラオスチーム 中野 真理子)



NPO法人 Tree Seed とこれから



2011年3月から始まった東日本大震災の被災地気仙沼への緊急支援、そして復興支援へと続いた地球の木の支援は、現地の皆さんとの声を伝えてくれるNPO法人Tree Seedとの歩みもありました。震災直後からの炊き出しや支援物資を送るなど、「必要なものを必要な時に」を心掛け連携を進めてきました。

今年に入りTree Seedから以下の報告がありました。

◆◆◆
「仮設住宅から復興住宅への引っ越しも進み見守り活動が終了しました。これから活動の方向を、これまでできなかった小中学生へ向け、仲間づくりや地域のまつりに参加するなど、自分たちの町・気仙



今年も復興支援まつりでお会いしましょう

沼の事を考える『ジュニアリーダー』の育成を進めています。この活動を進めるにあたり、地球の木にはお金ではなく自分たちの活動を理解して伴走、相談、時には叱咤してほしいと思っています。復興支援まつりには横浜に行き

皆さんの顔を見て活動報告ができるようにしたいと考えています。長い間ご支援をしてくださった多くの皆様に心から感謝いたします。そしてこれからも見守ってくださるようにお願いいたします。」

◆◆◆
この報告を受けて地球の木はこれからもTree Seedの活動を見守り、時には共同で何かを実施し、対等な関係をつくっていきます。

(理事長 堀千鶴)



会員であることが 私の誇り

私は、自分が年を取った時、障害を受けた時、住み慣れた自宅で暮らし続けたいという思いを実現するために、“あつらいいな”と思う手助けを創っていこうと23年前にワーカーズを発足し、法人となって、訪問介護、居宅支援、通所介護、配食サービス、障害者施設の食事作り、終末までいられる家を創ってきました。私が地球の木を知ったのは、26年前、私は、目の前のことを何とかしたいと思って活動していた頃、地球の木の活動は目に見えない、海の向こうを見ていきました。自分を取り巻く課題は自分の国だけの問題ではなく、もっと違ったことが海の向こうでは起こっているかもしれない。何か力を合わせれば色々なことができるかもしれない、と視線が遠くにあることに私は感動しました。

ネパールのエソダさんが、私たちのデイサービスに見学に来て下さった際、言葉は通じなくても、エソダさんとデイサービスの利用者さんとスタッフの笑顔が一緒になりました。体が自然に動き、心と心が通じ合った素晴らしい時間を共有する事ができました。心には国境がなく、心の垣根を取って、人と人がつながっていく活動が、世界の平和につながっていくように思います。私は、地球の木の会員ですが、何も活動ができていません。でも会員であることだけでも海の向こうの人たちとつながっている気がしています。そして、会員であることに誇りをもっています。これからも、応援していきたいと思っています。

(磯子区 関富美子)

活動日誌 (3月～5月 抜粋)

3月

- 5日 第9回理事会
- 12、13日 デポー展示会(霧ヶ丘)
- 22日 デポー展示会(緑園)
- 29日 デポー展示会(東戸塚)
- 29日 ちょっぴり体験! ラオス村のぐらし(小田原)

4月

- 7日 地球の木講座「今知っておきたいカンボジアの話」(なか区民活動センター)
- 9、10日 デポー展示会(鎌倉)
- 13、14日 デポー展示会(ひらつか西海岸)
- 16日 第10回理事会
- 18、19日 デポー展示会(すすき野)
- 23、24日 デポー展示会(南林間)
- 25、26日 デポー展示会(らいふたうん)
- 26日 監査

5月

- 7日 第11回理事会
- 8、10日 デポー展示会(たかつ)
- 12日 出前講座(横浜市立平楽中学校)
- 14、15日 デポー展示会(宮前平)
- 20日 かながわ湊フェスタ2018(沢渡中央公園)
- 26日 第19回地球の木総会
- 28、29日 デポー展示会(大丸)

ちょっぴり体験！ ラオスの村のくらし



3月29日湘南生活クラブ生協小田原センターでラオスのワークショップを行いました。

参加者は小田原市内の男子高校生を含む10人あまり。ラオスという国の名前は知っていてもどの辺にあるのか、産業や政治はどうなのか、村の女性や子どもはどのような生活を送っているのか、また「森林」の持つ意味などの話に皆さん興味津々でした。以下は高校生からいただいた感想です。

現地の道具に触れ体験しながら写真等を通してラオスの人々の暮らし、文化、価値観を垣間見ることができました。

特に、古い木に宿るとされる「ピー」の精霊信仰や森を開く儀式からは、我々が忘却がちな自然の脅威と恩恵、私たちを取り囲む全てのものへの敬意、地球の奇跡に対する喜び、そして何よりも大切な「愛」と「感謝」を見直すことができました。

さらにベトナム戦争での爆弾を利用したキットガーデンのプランターについて、本来人々の命を奪ってしまうマイナスイメージ(負の要素である)の「武器」を次世代へつなげていく「命」へと変えてしまうラオスの人々の前向きさ力強さには圧倒されるものがありました。

先進国の価値観をただ押し付けていくというやり方ではなくて、ラオスやアフリカ、太平洋の国々で営まれている生活や文化、価値観から学び「足る」を知り、本来何が大切なかを見極め、これらの国々の発展援助を通じ、先進国に欠けているもの失ってしまったもの等を今一度見直していくということがいかに大切であるかを考えることができました。

世界の国々がお互いに学び合いお互いに助け合いお互い成長していくこういった関係が実現していくことを望み、私たちができる小さなことから始めていきたいなと思います。

今回は貴重な時間をありがとうございました。

(小田原市 下田 祐輝)

あーすフェスタかながわ2018

5月19、20日JR本郷台駅近くの「あーすぶらざ」で行われた「あーすフェスタ」には、今年も大勢の人たちが訪ねにぎわっていました。地球の木も実行委員会に名を連ねていますが、たくさんの若い人たちに支えられたフェスタは活気でいっぱい。大人も子どもも楽しく参加できるプログラムは多彩で、学べることがたくさんあります。各国の食べ物、飲み物を楽しめるのもとても魅力的。会場で見た多くの笑顔に「多文化共生があたりまえの社会」の大切さを改めて思いました。

(会報作成チーム 沼田由美子)



■このところ「地球の木と私」を担当している。今回執筆をお願いした方がから「会員であることが誇り」と言っていただき、ぞくぞくする程嬉しかった!と同時に、会員の皆さまが「誇り」と思ってくださるような活動を続けていかなくては、と身の引き締まる思いでいる。(K.N)

■気仙沼のTree Seedからの支援金辞退の申し出に、子どもを旅立たせる時に似た寂しさをちょっと感じます。いつも控えめで奥ゆかしい小野寺代表たち。私たちはずつと見守っていきますよ。(Y.N)

デ
ポ
イ
展
示
会

6月14日(木) 東戸塚デポー	7月13日(金) 鎌倉デポー
6月22日(金) ほんもくデポー	14日(土) //
23日(土) //	8月22日(水) らいふたうんデポー
6月25日(月) 緑園デポー	23日(木) //
26日(火) //	8月27日(月) せやデポー
7月 5日(木) ひらつか西海岸デポー	28日(火) //
6日(金) //	

7月13日(金) 鎌倉デポー	7月13日(金) 鎌倉デポー
14日(土) //	14日(土) //
8月22日(水) らいふたうんデポー	8月22日(水) らいふたうんデポー
23日(木) //	23日(木) //
8月27日(月) せやデポー	8月27日(月) せやデポー
28日(火) //	28日(火) //



特定非営利活動法人
地球の木